





国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は十三ページある。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. 試験時間は、六〇分である。
12. 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(本文を一部省略し、表記を改めた箇所がある)

私はふだん大学で二十代の学生たちの研究を指導している。彼らと私は二十歳以上の年の差があるため、そのことにキインするさまざまな誤解が発生していると想像できるが、私が最近違和感を覚えるのは学生の言葉づかいである。人はもちろん自分の経験と想像の範囲でしかものごとを理解することができない。相手のことをわかったつもりでも、それは単に自分の視野の範囲内のみで部分的に理解したつもりに過ぎないのである。そこで、例えばはるかに経験が上の相手に対して、学生が「その気持わかります」とか「さすがですね」と言うことは、厚顔無恥で失礼に当たるのである。これは学生が相手の経験を自分のスケールに矮小化^aして当てはめ、表層的に理解しているだけのことであり、相手の真意を理解していると思うのは全くの誤解である。これはもちろんある程度仕方ないことであるが、さらに誤解の連鎖で、学生に全く悪気はなくても、大人は学生の発言を聞いて生意気で世間知らずな若者だと誤解してしまうこともある。人生はたしかにその時になってみないとわからないことが沢山ある。したがって、若者はこの事実を想像力を働かせて受け入れなくてはならない。そして大人の方も、いつか彼らにわかる時がくる、という I が必要であるし、また昔と今では考え方や状況が変化したのだから以前の常識が通用しないこともある、という事実も認識しておかなくてはならない。

さらに、「忙しい」という言葉も注意が必要だ。例えば新米の社会人が上司に向かって、「最近とても忙しくて……」と仕事ができなかった言い訳をしたとする。しかし相手の上司が極めて忙しい日常を送っている場合、その発言だけで怒らせてしまう可能性がある。新米からすれば、自分がいかに忙しいかを訴え、上司にその忙しさなら仕方ないと理解を示してほしいわけである。しかしそれは上司が忙しいと感じる基準を自分と同じようなものだと誤解しているといえる。新米がこれもあれもしなくてはならないといくら訴えても、それは上司にとって忙しさのうちに入らない場合もある。価値判断の基準が全く違うため、相手の基準を理解せずにものごを言うのは危険である。

例えば、その上司は今朝パリから帰国したばかりで、その足で会社に出て重要会議の議長を二つ務め、夜には北京へ会社の

命運をかけた商談に行かなくてはならないかもしれない。さらには一週間後までに審査しなければならぬ企画書を三つ抱え、裁判沙汰の案件も一つ抱え、といったことも重なっているかもしれない。これは極端な話ではなく、実際に私の周囲にはこのレベルの忙しさの人は普通にいます。そしてこういう忙しさは若いうちには想像しようのない、量的にも質的にも次元の違う世界のものであるため、新米には理解するすべもない。

こうした忙しさをはかる基準として、例えば時間を金額換算して考えるとわかりやすい。人のスキルによって時給は異なるが、例えば家庭教師のアルバイトをしている学生が時給^A二千円だったとしよう。つまり彼らの時間価値はこの金額を基準に考えることができるのだ。それでは忙しい上司の時給はどれぐらいになるか。実例を一つ挙げると、ある活躍している人が仕事で生み出している価値を時給換算してみたところ、一分間でおよそ一万円になった。時給でなく分給一万円である。これらももちろん私も学生の時には想像すらできないレベルである。こういう人との会合では、相手を三分間待たせるだけで^B機会損失^Bの三万円の罰金が発生するようなものだ、ということをお腹に^イメイ^イしておく必要がある。

我々研究者は学会での研究成果発表が年間の恒例行事の一つである。しかし、その発表の持ち時間は通常はおよそ二十分程度と残念ながら短い。沢山の人が発表するのでこれはやむを得ないが、この時間内で他の研究者に対して自分の研究の面白さを伝え、かつ結果の重要性をきちんと報告するのは難しい。そこでいろいろと言いたいことを省略する必要に迫られるが、これが誤解を生みやすい。

例えば、自分の研究内容を詳細に述べる前に、まずは過去の関連研究の内容を紹介する。その上で、過去の研究と自分の研究の違いを明らかにして独自性をアピールしていく。しかし時間がないため過去の研究をすべて^ウモウ^ウラすることはできず、代表的なものだけに絞って紹介せざるを得ない。そうすると、例えばその会場に関連研究をしている人がいて、その先生の研究に言及しなかった場合、無視されたと誤解して立腹する人もいます。この場合、発表した本人にはまったく悪気はなく、もちろんその先生の研究は知っていたが単に時間がなくて省略しただけなのである。ただ、たまに本当に知らない場合や、わざと無

視する場合もあつて事情は複雑である。

さらに自分の研究内容を発表する際も、メインとなる結論以外は切り捨てなければならぬ。そうすると、聞く人はそれが全てだ、と受け取ってしまう可能性があり、あの研究者は結果に対する考察が甘いと誤解してしまう場合もある。発表した本人にとっては、その結論に達する背後に膨大な試行錯誤があり、関連して得た結果も沢山あるのだが、それは短い時間では

II せざるをえない。 こうして聴衆が発表者を低く評価してしまうことは学会ではよく起こることである。

説明不足の例は枚挙に暇がないが、例えばリスクの説明を半ば無意識に避けてしまうこともよくある。保険や投資、あるいは病院での手術や投薬などにはリスクがつきものなのだが、それを提供する側はリスクの話ばかりするわけにはいかない。投資関係の契約書などには、虫眼鏡で拡大しないと見えないぐらいの小さな文字で「元本保証ではありません」などと書いてあるものもある。薬を使う際も、端の方に小さく書いてある副作用の例を見ると使いたくなくなるぐらい悲惨な実例が載っていることもある。これはもちろん、あまりリスクを説明すると客が逃げてしまい、機会損失になることを提供側は恐れているのだ。不安をなるべく煽りたくない、という心理と説明する時間が限られている、という理由から、どうしても説明ではプラス面を強調しがちになり、マイナス面を省略するようになってしまう。さらに行動経済学によれば、人はプラス面よりもマイナス面の印象を強調して感じるものがわかっており、例えばその投資によって何億円儲けたという話をいくらされても、たった一つの破産した事例を言うだけで尻込みして手を引いてしまうこともあるのだ。そうすると、ますますマイナス面の説明は省かれ、その結果プラス面を信じて誤解して契約する人が増えてしまうのだ。

(西成活裕『誤解学』による)

注 元本保証 —— 投資して損をしても、もとでとった金額だけは手許に戻ってくること。

行動経済学 —— 理想的なモデルではなく現実的な人間の経済行動に焦点をあてた経済学。

問一 傍線ア「キイン」、傍線イ「メイ(ジ)」、傍線ウ「モウラ」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二 傍線a「矮小化」、傍線b「暇」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三 I にあてはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 洞察力
- ② 分析力
- ③ 包容力
- ④ 俯瞰力

問四 II にあてはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 割愛
- ② 割引
- ③ 分割
- ④ 区割

問五 傍線A「時給二千円だった」における「た」と同じ用法の「た」として最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① はい、今ちようど帰ったところです。
- ② 明日会ったときに、お金を返すから。
- ③ その人は、青ざめた顔で立っていた。
- ④ 曲がりくねった道を、ゆっくり進む。

問六 傍線BおよびDの「機会損失」の説明として最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① もしかしたら自分が手にすることができたかもしれない、よい機会を取り逃がすこと。
- ② もしかしたら自分が相手にもたらずることができたかもしれない、よい機会を奪い去ること。
- ③ もしかしたら自分も相手と同じほど得られたかもしれない、よい機会を一度になくすこと。
- ④ もしかしたら相手が自分に与えようとしていた、よい機会を相手に与えさせないこと。

問七 傍線C「虫眼鏡で拡大しないと見えないぐらいの小さな文字」が用いられている事情を説明したものととして最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① プラス面とマイナス面を詳しく説明していると分量がどうしても多くなってしまっているので、限られた紙面のなかに入れないようにすると小さな文字を使わざるをえない。
- ② プラス面とマイナス面とは、人はどうしてもマイナス面の方が気になってしまうことが学問的に分かっているの
で、小さな文字にして気持ちの負担を軽減させる。
- ③ プラス面とマイナス面とは、マイナス面のほうが重視されることから、意識しないうちにマイナス面の部分だけが
小さな文字によって表記されるようになった。
- ④ プラス面とマイナス面のうち、マイナス面が多く説明されていると人の意欲が失われてしまうので、なるべくマイナ
ス面に気づきにくいように小さな文字にした。

問八 二重傍線「上司が忙しいと感じる基準を自分と同じようなものだ」と誤解している」と同じ内容のことを述べている、三十
字の箇所を指摘し、最初と最後の五字を記せ。

問九 筆者は、誤解を引きおこすもの一つとして、「価値判断の基準」の違いを挙げているが、誤解を引きおこすものとして、さらに指摘できる語を、本文中から四字で抜き出して記せ。

二

次の文章は、江戸幕府で要職を務めた柳沢吉保（一六五八〜一七二四）の側室正親町町子（？〜一七二四）の日記『松陰日記』の一節である。幕府の職から退いた吉保は、町子らとともに江戸郊外の別邸で日々を過ごしていた。これを読んで、後の問に答えよ。（一部本文や表記を改めた箇所がある）

春秋の色香につけても、己が様々に心をやりつつ、移り行く月日も知らず。さるは籬まがきの竹の一節も飽かぬことなき御住すまか処なれば、「いみじうになし」と思ひしみにたるは、例の癖なれど如何はせん。ここはしも深からねど、世の憂き目見えぬものから、さすがに八重やへ葎むくらにも障らぬ人の心は今しも見えつつ、なほいともの寂しき罪はえ得まじき山なりけり。松の柱、杉の戸いみじう事削がせ給へど、昔よりさる心ばへにし置き給へるを、今またさるべからん所なども添ひつつ、おはします所をはじめて、方々かたがたに願ひの心ばへを籠めて掟てたれば、なほいと広らかに作り続けて、此方こなた彼方かなた行き通はし、いと雅やかなるものから、をかしよう心ゆきたる様なり。

六義館と聞えしは、常の方かたに続きて、園の方ゆほびかに見やりたる程いみじう面白し。御前近く紅葉もみぢあまた植ゑたる所は初入はつしほの岡なり。I ばかり、ともすれば時雨しぐれめく空の気色など、ただこの辺り出入り心地して、いくらとなき梢こぼども、あるは濃く薄く千入ちしほと焦がるるなど、錦を張りたらんやうなるに、はらはらと零こぼるる雨の、身に染む心地なるが、見るがうちにまたとく晴れて、夕日の目映まばゆきまで輝き合ひたる色合ひ、龍田たつた姫ひめに劣らず。あるは遅れたる木末こすゑのまだ青きが、所々うらや羨むやうに立てるもをかし。「今幾日いくなかありて紅葉せん」と言ふに、「五、六日の程」と言ふ。また「いづら、それをも待たじ」など言ひしろふ程に、夜の間の雨 II に降りたる翌朝つとめて、見ればやうやう心もとなき程に色付く。言ひ当ててしたり顔するもあれば、片方かたへには妬ねたがりなどするを、人々笑ふ。御前によませ給ふ。

浅からぬ岡の名なれや初入も日数に染めし露のみぢ葉

年頃の御本意にて、かく静かに明け暮るる月日に添へては、厳めしう世に有り難たぬしき例におぼえけり。「過ぎにし方はさるも

のにて、いとかく艶にをかき方取り集め、花も紅葉も朝夕のもてなしにすばかりの事は、またもありけり」と、やうやうな

ん思ひ知る。昔より心寄せ聞ゆる人々など、折々の人目離れぬばかり、遙々と分け入る事なほ絶えず。さるはいと珍らかにをかしう、つれづれ慰むばかり御物語り Ⅲ にて、昔今の事、くづしいでつつ語らひ給ふ事、折節につけて尽きせず。こなたは、直路に世を顧みんものとし給はず。何処も何処も引き切りたるやうにておはしませば、「いでや、世の中の手ぶりも忘れ侍りにけり。心をばさるものにて、上辺は自づから無礼にもこそなりぬべけれ。ひとへに山賤の習ひに許されをかうぶり侍るべし」など、人々御対面の折からは宣はず。また、たまさかにもたづね参る人々などは、まづこの山水の濁りなき御有様を羨み思ふ。

注 御住処 —— 下屋敷を改築し吉保の引退後の住居となつた六義園。現在の東京都文京区本駒込にその旧跡がある。

六義館 —— 六義園内の別館。

初入の岡 —— 初入ははじめて染まること。初入の岡は六義園内にあつた紅葉の名所。

千入 —— 幾度も染まること。

龍田姫 —— 秋を司る女神。紅葉の名所である奈良の龍田山に住むとされた。

問一 傍線1・2を口語訳せよ。

1 いみじうになし

2 をかしう心ゆきたる様なり

問二 傍線A「八重葎にも障らぬ人の心は今しも見えつつ」は、紀貫之の和歌」とふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にも障らざりけり」(『新勅撰和歌集』卷一・春歌上)をふまえての表現である。ここで筆者が述べたかったこととして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 人が訪れない侘び住まいでも、毎年必ず春は訪れることから、自然こそが真の友人であることを、今こそ実感できたということ。

② 俗世間で失脚した後は、侘び住まいを誰も訪れないことから、真の友人などいないことを、今こそ思い知らされたということ。

③ 侘び住まいに移居した後までも、変わらずに通つて来てくれる友人や知人の誠実さを、今こそ見極めることができたということ。

④ 俗世間から退いたにも拘らず、侘び住まいにまで陳情に来る友人や知人のあつかましさを、今こそ煩わしいと感じたということ。

問三

空欄

I

には、陰暦の九月を意味する言葉が入る。これを漢字二字で記せ。

問四

空欄

II

・

III

に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号を

マークせよ。

① II—あらか・III—げざやか

② II—おいらか・III—おほどか

③ II—あざやか・III—にぎやか

④ II—しめやか・III—こまやか

問五 傍線B「いづら、それをも待たじ」とあるが、その意味するところとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① いやいや、五、六日もかからず、もっと早い時期に色付きはじめるでしょう。
- ② どうでしょうか、そんなに待たずに紅葉狩りに行けるのではないのでしょうか。
- ③ いやいや、五、六日も待っていたら、紅葉の盛りを見逃してしまおうでしょう。
- ④ どうでしょうか、そんなに待たず濃い色になっていくのではないのでしょうか。

問六 傍線C「やうやうなん思ひ知る」とあるが、だれがどのようなことを「思ひ知」ったのか。次の中から最も適切なものを選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 吉保が、花や紅葉などの風情を尽くした隠居生活を満喫しつつも、繁忙を極めた幕府在職時代の生活を、そろそろ懐かしく思い始めている。
- ② 町子が、吉保在職時代の上屋敷等での典雅な饗宴も素敵だったが、花や紅葉などの風情を尽くした六義園での接客も趣深いと実感している。
- ③ 吉保が、幕府在職時代の慌ただしい生活を時折回顧しつつ、花や紅葉などの風情を尽くした隠居生活もそれほど悪くないと思いはじめている。
- ④ 町子が、栄華を極めた吉保の在職時代も良かったが、花や紅葉などの風情を尽くした六義園での閑雅な暮らしも素晴らしいと実感している。

問七 傍線D「羨み思ふ」とあるが、その羨望の対象となっているものは何か。次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 六義園に引き籠もり和歌や書画に耽溺する吉保の芸術的生活。
- ② 吉保が隠居する六義園内にある築山や池水の類い稀な壮麗さ。
- ③ 俗世間を離れ六義園で静寂に過ごす引退後の吉保の日常生活。
- ④ 六義園内の吉保の居所に掛けてある山水画の名品類の見事さ。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(返り点・送り仮名を省いた箇所がある)

越前侯光通みつみち之時ニ、有リ西尾伝兵衛ナル者。扈從之臣也。嘗テ饋ニ食ヲ於

君前ニ、光通見食中有汚物。色變ジテ示シテ之ヲ伝兵衛、曰ハク、「看レ之ヲ。」伝兵

衛受ケテ輒ハ食ヒ尽シヌ。光通怒リテ曰ハク、「寡人言ヘリ唯看ヨト、未ダ嘗テ言ハ食ヘト也。」伝兵

衛謝シテ其粗忽ヲ而止ミキ。蓋慮レルナラン其咎ノ及バンコトヲ厨人ニ也。

〔『続近古史談』より〕

注 越前侯光通 —— 福井藩第三代藩主、松平光通(一六三六〜七四)。

扈從之臣 —— 側仕えをする家臣。 饋 —— 食事を供すること。 厨人 —— 料理人。

問一 傍線 a「輒」・b「蓋」の読みとして、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① まさに
- ② けだし
- ③ なんぞ
- ④ すなはち
- ⑤ なほ
- ⑥ もとより
- ⑦ もし

問二 傍線 A を書き下し文にすると、「光通、食中に汚物有るを見る。」となる。これをふまえて、「見」と「有」の部分に返り点を付けよ。(送り仮名は不要である)

問三 傍線 B「寡人」とは誰を指すか。次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 将軍
- ② 光通
- ③ 伝兵衛
- ④ 厨人

問四 傍線 C「未嘗言食也」を、内容がわかるように口語訳せよ。

問五 この文章の筆者は、文中の伝兵衛の行動をどのように評価しているか。次の中から最も適切なものを一つ選び出して、

その番号をマークせよ。

- ① 殿の食事への怒りを、身を犠牲にしてくい止めている。
- ② 殿の食事係として、美味でないものを供してはいない。
- ③ 殿の食事係として、あまりふさわしいとはいえない。
- ④ 殿の食事を作った人々への、細やかな気配りがある。